

諏訪之瀬島の火山活動解説資料

福岡管区気象台

地域火山監視・警報センター

鹿児島地方気象台

＜噴火警戒レベルを2（火口周辺規制）から3（入山規制）に引き上げ＞

御岳^{おたけ}火口では、昨日（16日）から本日（17日）にかけて火口中心から1km近くまで飛散する大きな噴石が複数回観測されており、噴火活動が活発化しています。

諏訪之瀬島では火山活動が高まっていることから、17日02時35分に火口周辺警報を発表し、噴火警戒レベルを2（火口周辺規制）から3（入山規制）に引き上げました。

【防災上の警戒事項等】

御岳火口から概ね2kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒してください。

風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。

地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

○ 活動概況

御岳^{おたけ}火口では、長期的に噴火を繰り返す中で、噴火活動がさらに活発化しています。

昨日（16日）から本日（17日）にかけて、御岳火口中心から1km近くまで飛散する大きな噴石が複数回観測されています。昨日20時14分及び本日02時12分の爆発では、弾道を描いて飛散する大きな噴石が火口から南方向に800m付近、南東方向に1km付近まで飛散しました。爆発に伴う噴煙は雲のため不明です。

爆発は、16日22回、本日03時まで1回（速報値）発生しています。

ナベタオ観測点の傾斜計では9月13日頃からわずかな西上がりの変動がみられています。

この火山活動解説資料は福岡管区気象台ホームページ（<https://www.data.jma.go.jp/fukuoka/index.html>）や気象庁ホームページ（https://www.data.jma.go.jp/vois/data/tokyo/STOCK/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php）でも閲覧することができます。

本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.data.jma.go.jp/vois/data/tokyo/STOCK/kaisetsu/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院、京都大学、東京大学及び十島村のデータも利用して作成しています。資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』を使用しています。



図1 諏訪之瀬島 警戒が必要な範囲

御岳火口から概ね2kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒してください。風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石が風に流されて降るおそれがあるため注意してください。地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。



図2 諏訪之瀬島 噴火の状況（上：16日20時14分、下：17日02時12分）

16日20時14分の爆発及び17日02時12分の爆発では、弾道を描いて飛散する大きな噴石が火口からそれぞれ南方向と南東方向に1km近くまで飛散しました（白矢印）。

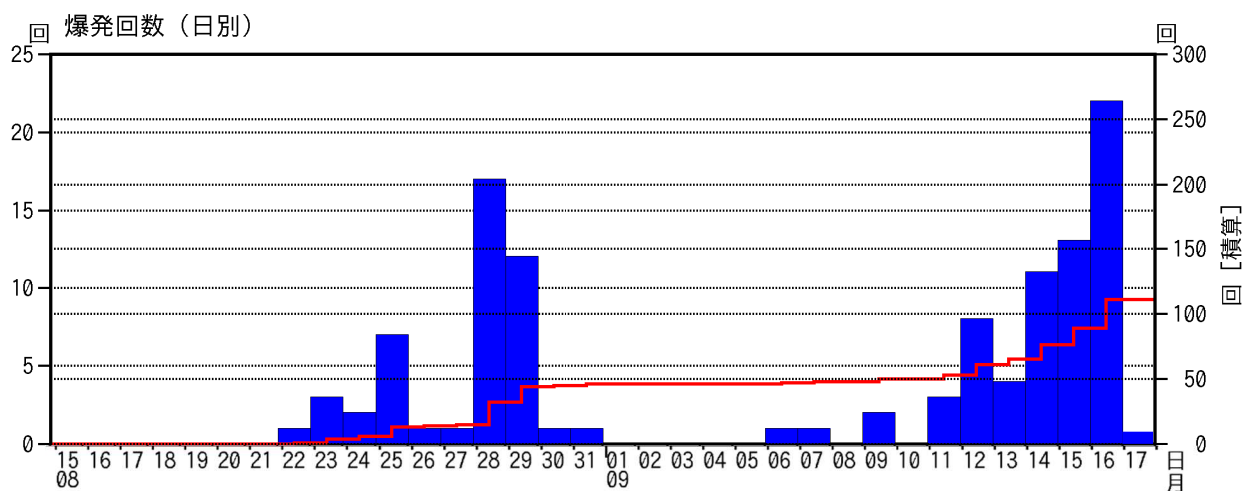


図3 諏訪之瀬島 爆発の日別回数と積算回数（2021年8月15日～9月17日03時（速報値））
御岳火口では、活発な噴火活動が続いています。

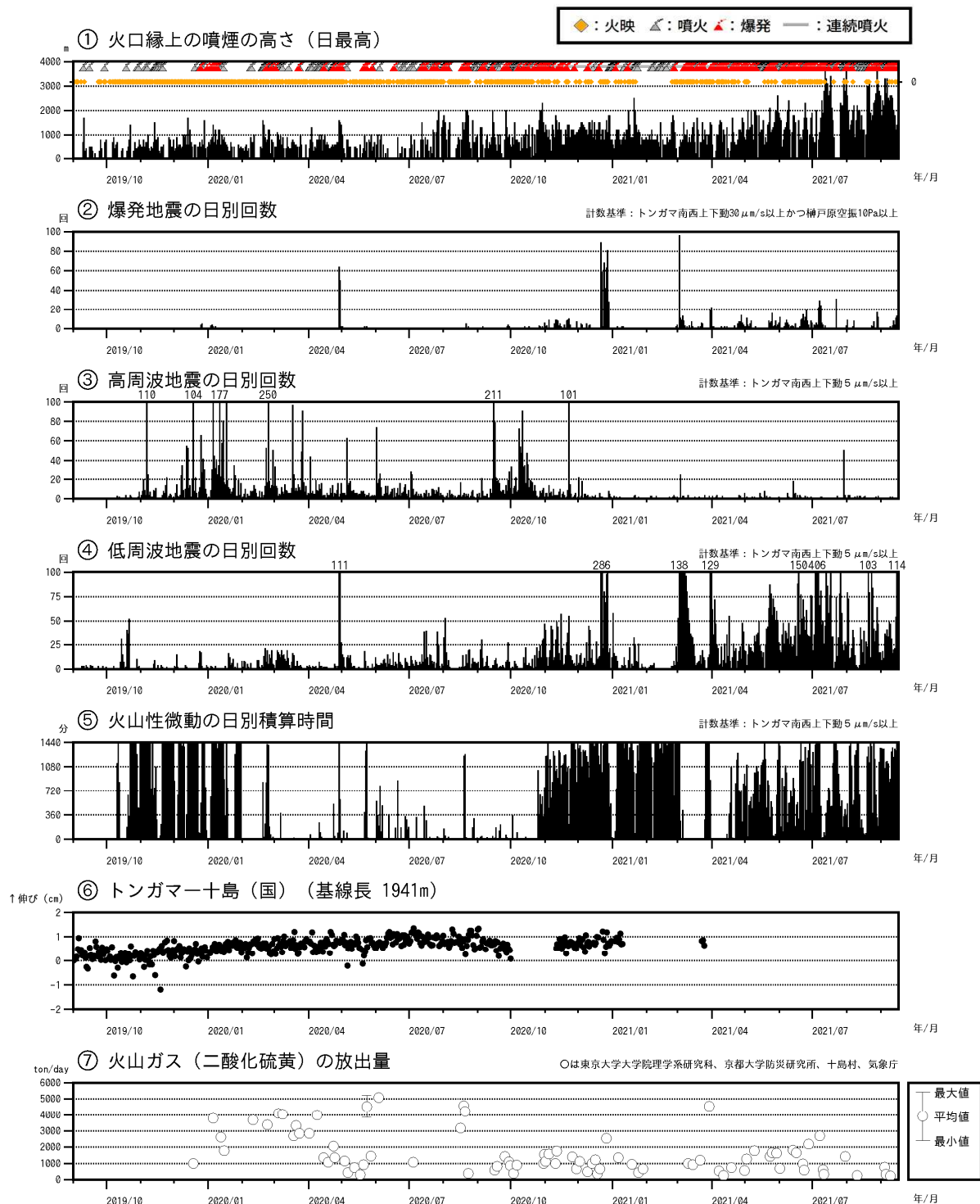


図4 諏訪之瀬島 最近の火山活動経過図（2019年9月～2021年9月17日）

- ・御岳火口では、活発な噴火活動が継続しています。7月中旬以降、噴煙の高さが3,000m以上の噴火が度々観測されています。
- ・火山性微動は主に噴火に伴って発生しています。
- ・東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、十島村及び気象庁が実施した観測では、9月の火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は概ね1日あたり200～800トンで経過しています。

東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、十島村及び気象庁は2019年12月より火山ガス（二酸化硫黄）放出量の観測を始めました。

トンガマ南西観測点の地震計の機器障害により、ナベタオ観測点または御岳南山腹観測点で計数している期間があります。

⑥の基線は図5の①に対応しています。空白部分は欠測を示しています。

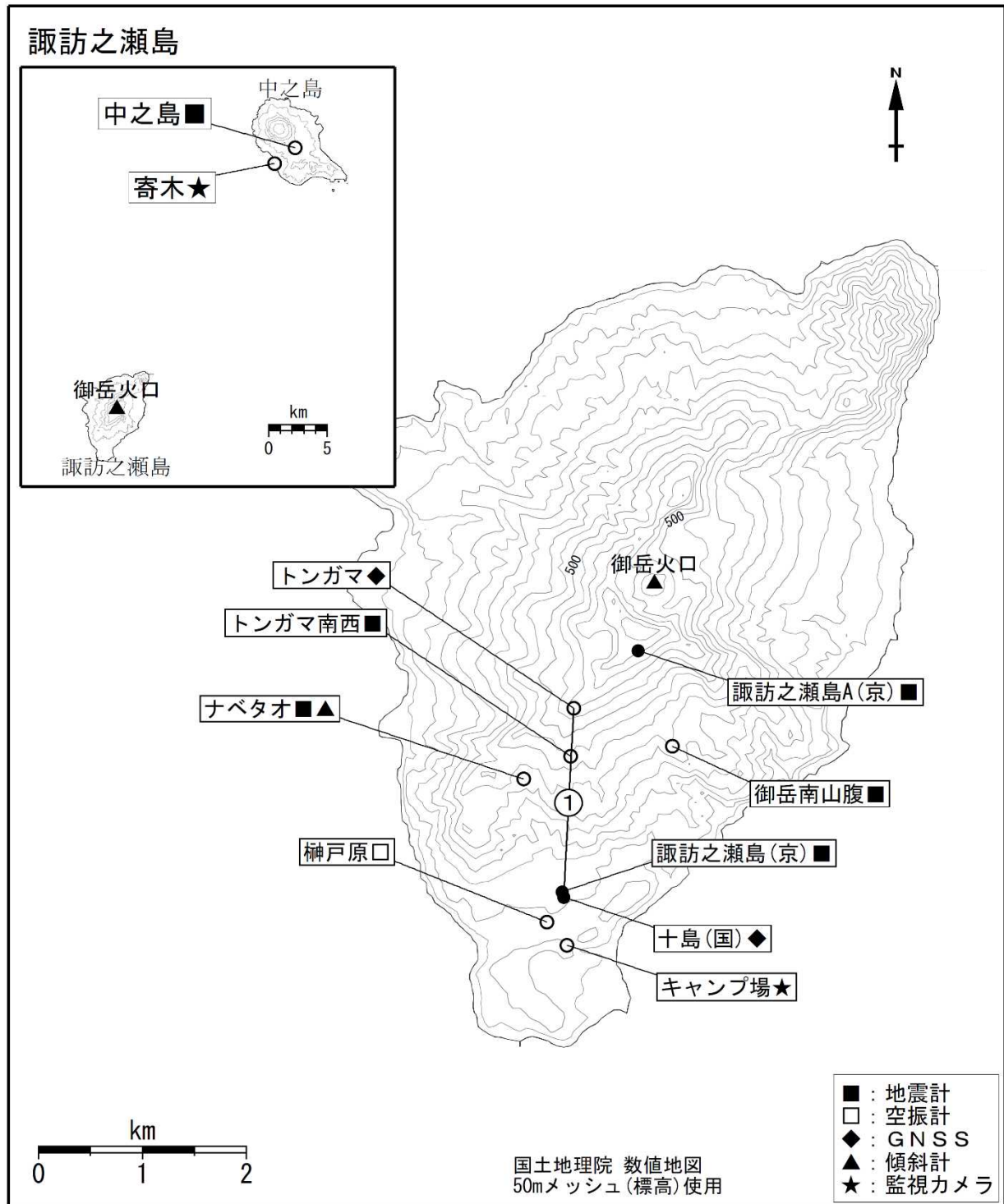


図5 諏訪之瀬島 観測点配置図とGNSS連続観測による基線番号

小さな白丸(○)は気象庁、小さな黒丸(●)は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
(国)：国土地理院、(京)：京都大学